
コミュニティを探して

(4)

藤 信子

前号に「病氣→薬」という図式を植え付けるのに、TVや町で見かける広告量の多さも関連しているのではないかと書いた。個人の思考や行動に対してCMの影響が大きいということ、今更と思われるかも知れないが、少し考えてみても良いのではないかと思う。東日本大震災後、原子力発電所が稼働しないので電力不足になるという時に、私が不思議だったことの一つがTVの放送時間が短縮されなかったことだ。TVを付けているのはそんなに電力を使用しないのだろうか？それに

しても、ずっと昔のように昼間は放送しないと誰も考えなかったのか。それともTVというのは、極めて大事なメディアなので放送を短縮するわけにはいかない、と考えている人がいるのだろうか？新聞のTV欄を見る限り、そうだろうかと思うけれど。そこで、これは全くの邪推だけれど、もしかしたらCMのスポンサー企業との関連で、そう簡単には放送時間が短縮できないのではないのだろうか、と考えている。人の生活に必要なものを作って売らなければならないから、あ

んなに騒ぎ立てて、商品名を皆の記憶に植え付けようとしているのだろう。意識に登らない弱い刺激を提示して、見た人が気付かないうちにコーラを飲みたくさせた閾下知覚の実験の話を持ち出さなくても、あれだけの商品の連呼にさらされると、購買欲がでてくるのではないだろうか。

CMが悪いとかという話ではなく、量の問題だと思う。浴びせかけるような流し方というのは、考える暇を与えない。私にとって必要なものかどうか、他のものと比較して手に入れる価値があるのか、など考える暇はない。そんなオーバーなと思うかもしれないけれど、何度もきれいな映像を見たりしていると、それはいいもののように思えるのではないだろうか。例えば震災前オール電化のマンションをしきりに宣伝していた。私から見ると、ミレニアム問題を経験しているので、単一のエネルギー源での生活というのは、リスクが大きいと思うから、とても良いとは思えないけれど、立場を変えれば高齢になった時の火の管理など便利なものかもしれない。でも今から思うと、よくもまあ電気を沢山使えというばかりの発想には驚いてしまうけれど、電力会社は原子力発電で、沢山の電気がまかない続けられるからとっていたのだろう。

私がCMの押し付けるような方法に考え込んでしまうのは、そのような方法が教育にもつながっているのではないかと感じているからである。日本の1990年代の子どもたちが

1950年代の子どもたちに比べ、主体性や自発性、想像力が乏しくなっていること、そしてこれは、直線的な成長をイメージした価値観に沿ってより早く答えを出す社会を作ってきたからではないかと、私は考えている（藤2011）。個人の発達の問題だけでなく、現代の社会が持っている問題である直線的な成長を信じる価値観に対しては、対象に関わりながらいろんな見方に気づき、考えることを重ねることで、自らの価値観を考え続けることが必要なのではないかと考えている。ところでそのように考える時に大事なことは、何だろう。

価値観を押し付けられずに、上関原発に反対した祝島人たちは、自分たちの島の歴史と文化を誇りに思い、そして美しい大自然があったからこそ、平和に豊かに暮らしてきたという思いから、30年にわたって原発に反対し続けた（福島事故後準備工事は中断となっている）（山秋 2012）。自分の土地で、海で採れるものの豊かさを知っているからこそ、それを守りたい、子孫に伝える必要があると考える強さが、土地の自然や暮らしを離れ、大きな官庁や会社のデスクで数字を見て考えることと、対峙していったのだと思う。1971年以降、原発を作らせなかった地は30か所以上あり、現在運転している原発は1970年までに計画が浮上したものだけだという（山秋 2012）。現在の原発の立地は17か所（50基）だから、1971年以降各地の人々の凄まじ

い努力があったのだということが理解される。祝島のデモは 1982 年に始まり、2012 年 11 月で 1150 回になったという（山秋 2012）ことを少し考えてみても、各地でどんなだったと思う。そんなことを考えると、日本の各地には自分たちの自然や暮らしを大事にしたいと、工夫したり頑張る人たちがいるんだと、少し元気になれるような気がする。

私にとって大切な暮らしという時に、何を手掛かりに考えるのだろうか。大量消費を促す米国資本に対して怒っていた J I C A でニカラグアに行った看護師の話を思い出した。伝統的なニカラグアの食事をしていると健康に良いのに、マクドナルドが米国から入ってきたので、自分の家で鶏が産んだ卵を売って、マックとコーラを買うという、理不尽さを彼女は怒っていた。地元でとれた食材より、ファーストフードの方が美味しく、おしゃれなのだろうと思う。しかし、やっぱり変だと思った方がいい。ベトナム戦争の時、アメリカ軍は兵士の士気を保つために、ベトナムのジャングルの中にまで、ハンバーガーを届けたというが、これは中毒と言ってもいいんじゃないだろうか。目の前にある素材から、味を引き出すことを考えることも、直線的成長という価値観や押し付けに対して私らしい価値の模索だと考え、実行していこうと思っている。

—文献—

藤 信子 (2011) 多様な個性を受容する子どもを育む. 教育と医学 59 (3) 13-20

山秋 真 (2012) 原発をつくらせなかった人びとー祝島から未来へ. 岩波新書